

寺田寅彦の野並亀治宛て絵はがき発見

編集部

寺田寅彦の銅像制作に関する作業を進めるうちに寅彦が野並亀治に宛てた絵はがきなど貴重な資料が発見された。はがきは6枚あり、調べたところ寺田寅彦全集第25巻（書簡編）に収録されていたものである。写真とともに紹介する。

① 書簡番号 60（明治41年）



（東京より）シベリア経由 英国ロンドン日本大使館気付 野並亀治様

御端書難有拝見致候、御入英以来御勇健の赴奉賀候。珍談も少々は有之べくと被存御洩しを願度祈候。ロンドンフォグに^あ中てられぬ様御用心専一に存じ候。東京は歳末に迫りて何となくざわざわ致候 福引大売出の赤旗到处の街頭に立ち並びて名物のから風にあをられ居り候。しかし例年の通不景気不景気と申居候。」竹崎は喉の病気にて湘南へ避寒の為旅行致し居り候。なほなほ御自愛専一に奉存候 草々

十二月廿日

寅

② 書簡番号 65（明治42年）

（東京より）シベリア経由 ^{ベルリン} 伯林独逸大使館気付 工学士 野並亀治様

^{ロンドン} 倫敦よりの御手紙拝見致候、小弟来る三月廿七日横濱解纜^{かいらん}五月上旬伯林着の予定に御坐候どうか伯林にて御目にかゝり度と存居候へ共余りおそく相成候故如何哉と存じ居り候。御依頼の品若干試に用意致すべくと存候へ共行違ひては無益に相成可申と心配致居候。竹崎は病気の為め広島県下の収納所へ転任致し候。小野君に宜敷

二月十六日



③ 書簡番号 236 (明治 43 年)



(ロンドンより)

(絵；ウエストミンスター寺院)

シベリア経由 東京麹町区大蔵省専売局 野並亀治様

今度博覧会の職工になりて渡英ロンドンの烟の中にマゴツキ居り候 一月の後再び伯林にまい戻り候 御健康を祈り候 令夫人にも宜敷御鳳声を乞ふ

四月十日

寅彦

④ 書簡番号 251 (明治 43 年)

(ベルリンより) シベリア経由 東京麹町区大蔵省専売局 野並亀治様

毎度御便り難有う、不相変御元気で御出張の由大慶に存候 僕も不相変無事平凡御安心を乞ふ。Kopfkissen わざわざ御心配の由恐縮致候。伯林は町の並木も青々として往來の佳人も夏衣裳涼しげに見へ候

六月廿九日

寅彦

(注) Kopfkissen は枕。



⑤ 書簡番号 286 (明治 43 年)



(ベルリンより) シベリア経由 東京麹町区大蔵省専売局 野並亀治様

御手紙難有う、小弟近日月沈原に移ります、そして田舎の冬籠りをやります。伯林も離れ難い様な気がする、日が短くなって宵のライプチーガーストラーセが賑かです

十月十三日 寅

Lotheisen Planckstr. 18 Göttingen へ御便りを乞ふ

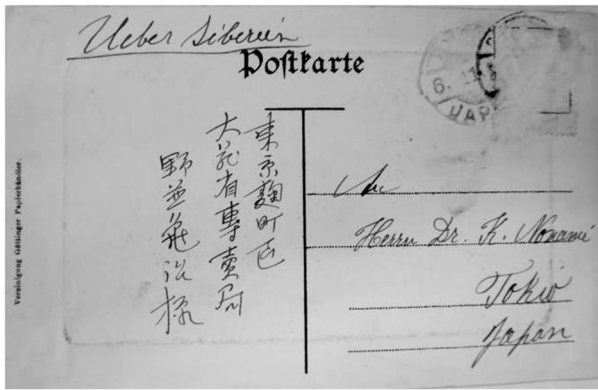
⑥ 書簡番号 299 (明治 43 年)

(ゲッチングンより) シベリア経由 東京麹町区大蔵省専売局 野並亀治様

愈々田舎へ引込んだ、秋葉黄落、これから冬籠りの仕度にかゝる。しかし東京から高知へ帰った様な気がして悪い心持はしません。」先日は御目出度う」又奮発して遊びに来る様にし玉へ、」下宿屋へ住って居ます、町の芝居の坐付女優が同宿して居るのは妙です

寅

宿所は Planckstr. 18 Göttingen に願ます



寅彦より先にヨーロッパへ出張していた野並宛てに東京から出したものが2通、留学中の寅彦がベルリンなどから東京の野並宛てに出したものが4通であり、いずれも絵はがき特有の美しさと肉筆の迫力が伝わってくる。活字では味わうことの出来ない貴重な雰囲気がある。シベリア経由と明記されていることも当時の郵便事情が推し測られる。

高知県人名事典（新版、平成11年、高知新聞社）によると野並龜治の略歴は次のようである。（寅彦より2歳の年長になる。）

明治9年10月11日、幡多郡古津賀村（現四万十市）で生まれる。叔父・野並魯吉のもとで滋賀県大津中学校から第五高等学校を経て東京帝国大学工学部機械科を卒業。初め鉄道局に入り九州小倉に勤務。明治37年専売局に入り、以来技師で終始した。文京区西片町で昭和40年没。88歳。

寅彦の日記には野並がたびたび出てくる。初出は五高2年生の明治31年2月19日であり、5月7日にかけて高知出身者と一緒に談話を楽しみ、蕎麦屋に出掛け、立田山に登ったりしておりその濃密な交際ぶりがよく分かる。5月7日は土佐会の送別会の賑やかな様子が詳しく書かれている。非常事態が発生するのは6月1日である。日記を引用する。

6月1日（水）

夕方清水なる野並を訪ふ。先日来チブス性^{かか}の熱病に罹り学校欠席日々病院に通ひ居る由なり。

6月6日（月）

野並君此日愈々病院に入る。学年試験には欠席する筈なりと。

6月8日（水）

夕飯後田岡と野並を見舞に行く。

6月9日（木）

夕飯〔后〕竹崎に到り共に富重方へ写真を取りに行き帰途病院なる野並を見舞ふ。この後、12日、14日、18日と病院に見舞っている。思い切った行動に出るのはこの後

である。

6月19日（日）

田丸先生を訪ひ野並の試験延期の事を願ひ其れより野並に行く。

6月21日（火）

午後は野並君追試業の事に就き近重に行き又木部君と狩野先生を訪ふ。到底追試業は許可なきが如き様子故失望して病院に赴きたれど其実を告ぐるに忍びざればよき程に慰藉して帰る。

6月22日（水）

田丸先生方に行き最後の手段として野並の成績を変更してくれ間敷やとの旨相談したれど何分^{むつかしき}敷故断念して帰る。此日にて3年生試験結了。

五高同窓会会員名簿によると野並は寅彦より1年早く明治31年に第2部工科を卒業している。（当時は9月入学、7月卒業）日記にはその後のことは書かれていないが、学校側の配慮があったことは間違いなく、運動は成功したと言えるようである。

次に出てくるのは明治34年で、妻・夏子が結核に感染して高知へ帰した後の4月8日からであり、35年、36年、38年、41年と互いに訪問しあったり会食したりしている様子が窺える。41年8月22日にはヨーロッパへ出張する野並の送別会が森田正馬宅で開かれ、出席している。9月13日は野並の出発が18日であることを書き留めている。この後が最初に紹介した絵はがきの時代になる。寅彦のベルリン着は明治42年5月6日であるが、ここで野並とたびたび合流していたようで、ロシアへ出かけるなどの野並の活躍ぶりは共通の友人である間崎道知宛ての書簡に活写されている。

寅彦が帰朝した明治45年には五高同窓会が開かれた。この年、帰国後の寅彦日記は残っていないが、夏目漱石が日記に書き留めていて同窓の結束の強さがよく分かる。

明治44年7月3日（月）

2時頃寺田がくる。第五の出身者が五六人精養軒で飯を食ふから出ないかと云ふ。雨では恐れるがと思つたが思ひ切つて出る事にした。（略）

精養軒では久し振りに木下理学博士、田丸博士、石崎所長、内丸助教授、野並専売局技師と寺田と余と落ち合つた。食後木下が余から叱られた話をする。懐旧談が多かつた。九時過出る。寺田が江戸川迄送つてくる。

その後も明治45年、大正3年、4年と同じような交際ぶりであるが4年10月28日には学士会で五高同級会があり、狩野田丸両先生、東、内丸、野並、木下などが出席している。

寅彦は大正6年7月1日に「「ラウエ」映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を受賞しているが、7月10日には野並の肝煎により精養軒で高知県出身者による祝賀会が催された。日記には律儀に出席者の氏名が書かれている。山崎直方、野並亀治、土

居千代三、田中茂穂、国沢健雄、森田正馬など 10 名である。20 日には田中、野並、山崎へ祝賀会の礼に行っている。

大正 7 年から断続的に交際していることが日記に出てくるが、昭和 7 年 2 月 14 日には、「両切烟草の包装フォイルが鉛の上に錫の皮膜を被つて居る、それが剥がれて鉛の露出するのを防ぐ必要あり、その露出の^{さま}状を験する方法はないか」という相談を受けている。この問題は理研で検討したようである。昭和 9 年 10 月 16 日には「野並君を西片町に訪ぬ、^{ゆえ}転宅との事故上富士前の新居迄行き用件依頼す」とある。上富士前町は本郷区であるが、先の人名事典では西片町で亡くなったとあるので戦後にでも戻ったのだと思われる。

今回、絵はがきと一緒に葬儀通知、5 周忌の偲ぶ会連絡書、寅彦画の色紙が発見されたので下に示す。

帝國學士院會員東京帝國大學教授理學博士寺田寅彦儀
永々病氣ノ處本日午後零時二十八分死去致候間御通知
申上候
追而來ル一月六日午前十一時ヨリ十二時マデ谷中斎場ニ於テ神式ニヨリ告別式執行仕候
 十二月三十一日

男 男
 親戚總代
 友人總代
 子爵
 北川正二
 大河内正敏
 松根豊次郎
 野並龜治

御手紙等入りませしが御出儀の考無折宜し御一禮御願ひ申上げます

發起人
 小宮豊隆
 藤原咲平
 野並
 宮
 豊
 電
 平
 治
 隆

昭和十四年十一月十五日

謹啓 晩秋の日さしも次第に弱くなつて今年も最早残り一月餘りとなりました。早いもので寺田寅彦先生が御亡くなりになつて今年が五年目に當ります。
先生を偲ぶ我々の情は一入切なるものがあります。そこで先生の御誕生日を^{さま}選び左記のやうな次第で「寺田先生を偲ぶ會」を催し度いと思ひます。何卒萬障御合せの上御臨席を御願ひ申上ます。敬具

記
 十一月二十八日(火) 午後五時半
 一、場 所 神田區一ツ橋學士會館
 一、追 憶 談 田中館愛橋氏、小宮豊隆氏、並びに有志諸氏
 一、會 費 四 圓
 昭和十四年十一月十五日



大正八年六月廿二日
 寅彦の画

会葬連絡では親戚総代が北川順(長姉・駒の三男)であり、友人総代として大河内正敏、松根豊次郎と並んで野並の名前がある。5 回忌案内では小宮豊隆、藤原咲平と並んでいる。改めて野並と寅彦の絆の強さ、寅彦亡き後の野並の気配りが思い知らされる。この 11 月 28 日は火曜日とあるので昭和 14 年のことであろう。色紙の裏には「寺田寅彦未亡人志ん子氏贈 昭和 15 年 4 月 12 日 龜治」とある。おそらく葬儀や 5 回忌で大いに世話になった野並に感謝して紳夫人が、所有していた寅彦画の色紙を贈ったものであろう。東京も高知も昭和 20 年に大空襲を受けて広範囲に炎上したが、これらが残ったのは関係者が大切に扱ったためだと思われる。

今回、非常に貴重な資料を拝見することが出来、編集部一同とても感激しています。関係の皆様へ感謝申し上げます。ありがとうございました。

(注) 日記などの引用では一部をアラビア数字に変更したりルビ、句点を補ったりしています。